

第一節 だいいちぶ 第二話 だいにわ 福良ヶ池の龍人 ふくらがいけ りゆうじん

きたがた 北潟には、
いま 今でも福良ヶ池という池があります。

いま 今から何百年前のお話
はなし でしたか、そのころの道は、
みち 二人の人間がやつと並んで通れるく

せま らいの狭いもので、
ふくらがいけ 福良ヶ池のまわりの道も同じようなものでした。
ふくらがいけ でも、
あめ 雨が降った日なんかは、
ふくらがいけ 福良ヶ池の水かさが増えて道は飛び石づたいになりました。
とき そんな時でも北潟から吉崎、浜坂
ほうめん 方面へ向う場合は、
ふくらがいけ 福良ヶ池の入口の瀬を渡っていったそうです。

とき ある時、
よんじゆう 四、十ぐらいの旅の男が、
たび おとこ 飛び石づたいに福良ヶ池の瀬を渡って
せ わた いました。
たいへん 大変寒
さむ い日だったので、

さむ 「寒いもう。」

ふくらがいけ と言いながら福良ヶ池のふちで
ようべん 用便を済ませました。
み 身ぶるいをして、
きたがた ふと北潟の方を振り向くと、

どうでしょう、そこには髪かみの長いきれいな女おんなの人が、立たっていました。びっくりした男おとこは、三分間さんぷんかんじつと見みとれていました。すると、女おんなの人は、旅たびの男おとこにこう言いったそうです。

「あなたは、三国方面みくにほうめんへ行いかれるお方かたと存ぞんじます。この手紙てがみを、一通いっつうお願ねがいしとうございますが……。」

「でっ、でも、私わたしは急いそいでいますので……。」

「そんなことおしやらずにお願ねがいします。」

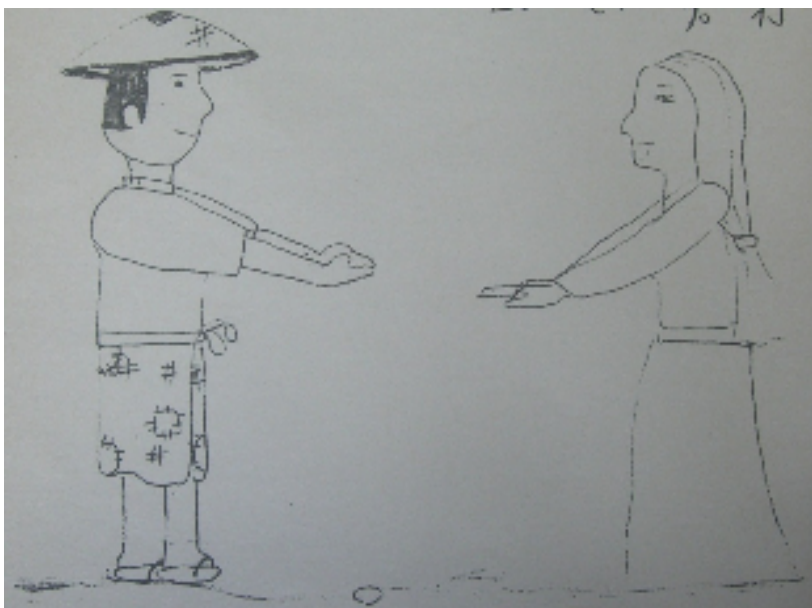
旅たびの男おとこは、その女おんなの人のあまりの美うつくしさにどうしても断ことわりきれず、

「喜よろこんで持もって行いきましょう。」

と、引ひき受うけたそうです。

「ところで、どこに持もって行いけばよろしいのですか。」

と、男おとこが聞きくと



「この先にある加戸の大堤（堤防のこと）の所で、男の人が待ち受けております。その男の人に手紙を、お渡し願います。」

と、言つたそうです。

おとこは、手紙を自分の懐へ深く入れて、歩き出しました。男はまだ夢ごこちでしたが、先ほどまで顔を出していたお天とう様は、いつの間にか雲に隠れていました。

そうしているうちに、加戸の大堤が見える所に来ていました。大堤の方を見ると、そこには、りっぱな男の人が、笑顔で立っていました。これを見た旅の男は、

「あ、この人だな。」

と、思い、さつそくその手紙を懐から取り出して渡しました。

「ごくろう、ごくろう、では読み上げるまで、しばらくお待ち下され。」

と言うと、その立派な男は、手紙を持って後ろ向きになり、黙って

読み始めました。旅の男は、向こう向きになって読み出した男の人の



しぐさが氣になり、そつと後ろからのぞいて見ました。

すると、なんとその手紙には、「この旅の男を取って食ってください。」と、書いてあったのです。旅のおとこはそれを見るなり、「食われてしまうくらいなら、逃げるだけ逃げてやれ。」と、あらん限りの力を出して、一目散にかけ出し、命から逃げ延びたこのことです。

この話が、いつの間にか世間に広がり、

「それは、福良ヶ池の竜人の仕業だろう。」という、

うわさが立ちました。そして、それ以後は、福良ヶ池で小便

をしたり、汚れ物を捨てたりする者は、いなくなつたそうです。

現在でも、福良ヶ池の竜人の威力に恐れをなしている

人が、この北潟にはたくさんいるようです。